

[大豆]

1. 作付の概況

令和元年度の作付面積は全国で143,500haとなり、前年より3,100ha減少した(前年対比98%)。九州では21,000haで、前年より400ha減少した(前年対比98%)。地域別では福岡県、佐賀県、長崎県、大分県、宮崎県、鹿児島県で作付面積がやや減少した。前年より作付面積が増加したのは熊本県のみであった。

2. 作況の概況

本年の梅雨入りは九州南部が5月31日頃、北部は6月26日頃で、南部では平年並、北部は3週間遅かった。梅雨明けは九州南部で7月24日頃、北部では7月25日頃で、南部で平年より10日遅く、北部で平年より6日遅かった。播種は梅雨明け前の7月中後半を中心に行われ、7月末までにはほぼ終了したが、播種後の降雨による湿害で、一部で出芽不良が認められたほか、初期生育が抑制された。また、8月下旬に入ると記録的な多雨となり、長期間湛水状態になった圃場が九州北部で見られ、生育が著しく阻害された。また、台風8号(8/6)、17号(9/22)の接近に伴う強風や大雨により倒伏が発生し、特に台風17号による潮風被害が有明海沿岸地域を中心に深刻であり、早期の落葉により粒数、粒大が減少し低収の要因となった。莢が伸長し始める9月から収穫の11月まで少雨傾向であり、土壌が乾燥状態となり子実の肥大に悪影響を及ぼした。収穫時期には晴天に恵まれ収穫作業は順調に進んだ。病虫害では、ハスモンヨトウはやや少なめか例年並みで、カメムシがやや多い傾向にあった。

以上のように本年は、8月の豪雨と台風による潮風害が深刻な影響をもたらし、さらに莢伸長～子実肥大期にかけての少雨により子実肥大が抑えられたことから、九州全体の単収は98kg/10aにとどまり、前年度との単収対比で64%、平均収量対比で62%と記録的な低収年となった。

県別の平均収量では宮崎県、鹿児島県を除いて平年を下回り、前年との収量対比では主産県の福岡で71%、佐賀で47%となったほか、長崎県で60%、大分県で93%、熊本県で85%となった。全国的には昨年に記録的な低収となった北海道では平均収量対比で94%と改善が見られ、それ以外の地域では高温、多雨、台風等の被害により平均収量対比が平年を上回ったのは四国のみであった。これらの結果、全国の単収は前年対比103%、平均収量対比89%の148kg/10aとなった。

収穫量は、九州では作付面積が前年対比98%、単収が前年対比で64%とともに減少したため収穫量は前年対比63%の20,500tとなり、12,100t減少した。また、全国では作付面積が前年対比98%で、単収が前年対比103%であり、収穫量は前年対比100%の212,300tで、1,000t増加した。

(大豆・資源作物育種グループ 大木 信彦)

令和元年度(2019)大豆作付面積と収穫量

全国農業地域 ・ 都道府県	作付面積	10 a 当たり 収 量	収 穫 量	前 年 産 と の 比 較					
				作 付 面 積		10 a 当 たり 収 量		収 穫 量	
				対 差	対 比	対 比	対 比	対 差	対 比
				ha	%	%	t	%	
全 国	143,500	148	212,300	△ 3,100	98	103	1,000	100	
九 州	21,000	98	20,500	△ 400	98	64	△ 12,100	63	
福 岡	8,250	110	9,080	△ 30	100	71	△ 3,820	70	
佐 賀	7,820	80	6,260	△ 180	98	47	△ 7,340	46	
長 崎	399	54	215	△ 69	85	60	△ 206	51	
熊 本	2,450	127	3,110	20	101	85	△ 510	86	
大 分	1,540	81	1,250	△ 90	94	93	△ 170	88	
宮 崎	219	112	245	△ 31	88	103	△ 28	90	
鹿 児 島	325	118	384	△ 39	89	110	△ 5	99	
沖 縄	0	18	0	0	nc	43	0	nc	

注) 農林水産省大臣官房統計部・農林水産統計Webサイト(令和2年2月28日公表)より引用。△は減少。